

■ 一日も早い帰国の実現に向けて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール

入賞作品集



 一日も早い帰国の実現に向けて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール

入賞作品集

主催：政府・拉致問題対策本部

後援：文部科学省、法務省

北朝鮮による日本人拉致問題は、我が国の主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であると同時に、拉致された方々の貴重な未来、多くの夢を断絶し、家族とのかけがえのない時間を引き裂く、人権・人道上の由々しき問題であります。

拉致被害者の救出は、日本政府の最重要課題であり、最優先で取組んでまいります。国民の皆様が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意志を示して頂くことは、問題解決に向けた力強い後押しとなります。

一方、これまで拉致問題について触れる機会の少なかった若い世代の方々への啓発が重要な課題となっております。

このため、全国の中高生の皆さんを対象として、授業でアニメ「めぐみ」を視聴し、さらに自分自身で拉致問題について学習し、拉致被害者や拉致被害者御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何が出来るのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクールを実施いたしました。

この度、応募された1915作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、ご一読いただけますと幸いです。

平成三十年一月

政府・拉致問題対策本部

作品総数 1,915作品

中学生部門 1,167作品

高校生部門 748作品

【最終審査委員】

○北朝鮮による拉致被害者家族連絡会	飯塚 繁雄 代表
○毎日新聞社	松田 喬和 特別顧問
○内閣官房拉致問題対策本部事務局	岡本 宰 内閣審議官
○文部科学省	下間 康行 大臣官房審議官
○法務省	菊池 浩 大臣官房審議官



表彰式の模様（2017年12月16日、東京都千代田区 丸ビルホール）

目次

中学生部門

最優秀賞	「国際社会全体の人権問題」 形 部 愛 徳島県阿南市立福井中学校3年	6
優秀賞	「拉致被害者の一日も早い救出を願って」 田中優芽 北海道滝川市立明苑中学校2年	7
	「幸せな人生を守るために」 佐々木健伸 愛媛県砥部町立砥部中学校2年	8
特別賞	「私が考えたこと」 梅橋 萌 福島県福島市立信陵中学校2年	9
	「信じる力で」 高木柚実凧 東京都立川市立立川第七中学校1年	10
	「北朝鮮による拉致事件」 原田日菜 徳島県阿南市立福井中学校3年	11
	「一刻も早い帰国のために」 橋本夏都 徳島県阿南市立福井中学校3年	12
	「北朝鮮による拉致問題の重さ」 宮田遥奈 徳島県阿南市立福井中学校3年	13

高校生部門

最優秀賞	「拉致問題解決への一步」 花山星太 愛媛県愛媛県立しげのぶ特別支援学校高等部2年	16
優秀賞	「風化させないために私にできること」 山崎裕香 北海道北海道北見緑陵高等学校1年	17
	「拉致から解放するために」 福島健輔 千葉県敬愛学園高等学校1年	18
	「めぐみを見て念うこと」 猪股亜沙美 福島県福島県立会津農林高等学校1年	19
特別賞	「あなたの中の人権問題」 寺田有希 千葉県敬愛学園高等学校2年	20
	「拉致問題解決に向けて」 前田ちあき 新潟県新潟県立長岡大手高等学校1年	21
	「拉致問題、忘れない」 井口真優 兵庫県兵庫県立姫路南高等学校2年	22
	「拉致問題について考える」 柳島真輝 佐賀県佐賀県立鳥栖商業高等学校2年	23

中学生部門

最優秀賞 「国際社会全体の人権問題」

徳島県 阿南市立福井中学校3年 形部 愛

九月十九日、ニューヨークで開かれた国連総会。アメリカの大統領トランプ氏の発言に、日本の人々は注目した。北朝鮮拉致問題。北朝鮮が、当時十三歳の女の子を拉致した事実を強く非難した。北朝鮮の大使が途中退席する一方で、「国際社会で大きな危機のうねりが起こる中、トランプ氏の発言には大きな意味がある。」と、日本では歓迎の声が上がった。今でこそ、重大な人権問題として認知されているが、始まりは四十年前のことなのだ。

一九七七年以降、何人もの人たちが忽然と姿を消した。誰の行方もわからないまま二十年という月日が過ぎた一九九七年、北朝鮮で姿を見かけたという報告を基に、北朝鮮に対して調査を求めた。しかし、北朝鮮は拉致を認めず公式な話合いさえもたれなかった。二〇〇二年の日朝首脳会談で、北朝鮮は拉致を認め謝罪したが、帰国できたのは五名、残りの人たちは死亡または未入境。被害者家族の期待は裏切られた。それから現在まで、多くの家族が、悲しみの中で、愛しい人たちの帰りを待っている。

その中の一人が横田めぐみさん。当時十三歳。めぐみさんは、普通の中学生の日常をいきなり壊され、一人北朝鮮に連れ去られた。めぐみさんの恐怖・絶望・悲しみはいかばかりであったか。

ところで、皆さんは「ブルーリボン」を知っているだろうか。ブルーの色は「日本海の青」や「青い空」を表している。これは、拉致被

害者の救出を求める運動の中で発案された。「生存と救出を信じている」という家族の意思表示なのだ。核・ミサイル問題によって関心が薄れてきている拉致問題。このブルーリボンは、この社会の中でいつまでも苦しんでいる人がいる、このことを決して忘れてはいけない、ということを私たちに訴えている。

このブルーリボンに続き、拉致問題解決の活動は各地で行われている。啓発活動やラジオ放送など、政府だけでなく民間団体も活動している。中学生の私にとって、こういった活動に参加することは容易ではない。しかし、小さいながらも解決への大切な一歩を踏み出すことはできる。それは、拉致問題に対して関心を持つことだ。小さすぎだと思う人もいるだろう。だが、関心を持つことで日常が変わってくると思う。初めに紹介したトランプ氏の発言に対しても、「ああ、そうなんだ。」と思うのではなく、この発言に驚き、友達に話すようになる。私も同じように行動したので、疑問は持たないでほしい。少しでも多くの人が、拉致問題に関心を持ち、次の人に伝えていくべきだと思う。この作文を読んで、少しでも多くの人に関心を持ってもうたいたい。

優秀賞 「拉致被害者の一日も早い救出を願って」

北海道 滝川市立明苑中学校2年 田中優芽

ある日突然、私と同じ歳の女の子がひとりぼっちで知らない国に連れていかれるなんて……。私は、アニメ「めぐみ」を見て、ニュースや新聞でしか聞いたことがなかったこの問題の本当の恐ろしさを知りました。

私は今、テニス部に入り毎日の練習に励んでいます。めぐみさんもまた、バドミントン部で毎日充実した日々を送っていました。この事件が起きなければ、きっと私と同じように家族や友人に囲まれ、自分の夢に向かって生きる幸せな人生を送っていたことでしょう。でも、そんなめぐみさんの人生は、北朝鮮に拉致されたことにより、大きく変わってしまいました。私には想像できないほどの恐怖、悲しみや苦しみ、そして悔しさがあつたと思います。

そして、日本で帰りを待つ家族の人生も悲しみに包まれたものとなっていました。

先日読んだ新聞記事には、国民大集会のことが載っていました。「そもそも家族会の活動が世代替わりするなんて、許してはいけないことだ。」この言葉はとも印象に残りました。これはめぐみさんの弟さんの言葉です。北朝鮮に拉致された日本人は、わかっているだけでも十七人だそうです。この四十年、めぐみさんやその家族と同じような悲しみを抱えている日本人が、この日本にたくさんいることを知り、私はこのような理不尽な行為を絶対に許してはいけな

いと思いました。

日本政府は、拉致被害者の帰国を求めて北朝鮮政府と話し合いを続け、五名の日本人が帰国していますが、完全な解決にはいたっていません。仮に北朝鮮に拉致されたすべての人が救出されたとしても、その方々の失われた時間が戻ってくることはないのです。

こう考えると、この問題が本当に解決することはありませんが、せめて、北朝鮮に拉致されたすべての人を明らかにし、北朝鮮は一人残らず拉致した日本人を返すべきだと思います。

そのためには、私たち国民一人一人が拉致という恐ろしい人権侵害の問題についてしっかりと理解し、すべての拉致被害者を日本に帰国させるように、北朝鮮に対し求め続けていくことが大切です。

私ができること、それは私も一人の日本人として、学校の授業などで北朝鮮拉致問題についてより深く学び理解すること、今もなお日本に戻ることでできない人たちがいるということを忘れないこと、そして、被害者全員の一日も早い救出を願って、拉致問題の悲惨さを多くの人に伝えていくことだと思います。

優秀賞 「幸せな人生を守るために」

人は、生まれると、幸せを求めて生き続ける存在だと思っています。私も好きなことをしたり、様々な義務を果たしたりしていくことで何か幸せを得たいものだと思います。

幸せに生きることは、当然誰にでも平等に与えられた権利であることは言うまでもありません。拉致問題のように人が幸せに生きる権利を奪う犯罪行為は、当然許されない、あつてはならないことです。つまり、拉致問題は人権侵害そのものです。

もちろん、世の中には人権侵害はたくさんあります。その中でも拉致はあつという間に相手の幸せや描いていた大切な夢を、そして望んでいた人生を、完全に奪い去ってしまったため、決して許してはならず、解消していかなければならない問題です。

僕には夢があります。教師になることです。しかし、夢に向かうとした時に、突然連れ去られ、人生が大きくゆがんでしまったら、僕ははつきり言って、死にたくなるかもしれません。しかし北朝鮮によって拉致され、まだ必死に生きている人がたくさんいることを考えると、日本で今生きている私たちが行動しなければならぬと思います。その一步はアニメ「めぐみ」を見ることだと感じました。被害者の一人、横田めぐみさんは、13歳で拉致されました。明るくまっすぐに毎日を過ごしていたのに、理不尽な拉致によって、何もかも奪われました。ご両親も、娘をとりもどすため40年間もの長い

愛媛県 砥部町立砥部中学校2年

佐々木健伸

間必死に戦っておられました。家族全員の人生をもめちゃくちやにする拉致は、余りにも重すぎる問題です。

僕は今14歳で、拉致当時めぐみさんは13歳でした。僕よりも年下の時に無理やり連れ去られるということがどういふことか、想像もつきません。しかし、アニメを見ることで、これが事実なんだとはつきり分かり、拉致に対する怒りと、被害にあわれた方々が一日も早く日本へ帰れるようにしなければという思いが込み上げてきました。

そして、僕には、この問題のために何ができるか考えました。まずは、家族や友人にも拉致問題について話してみます。中には関心を示さない人もいるでしょうが、少しでもその人たちの理解を深めていけば、何か変わるきっかけになると思います。国連総会でアメリカのトランプ大統領が拉致について言及しました。拉致問題は世界の問題です。人々がしつかり関心をもっていく力となるため、様々な活動や、現状を理解して、少しずつでも広げていきます。当然僕だけでは何も変えられないでしょうが、何か役に立つ生き方をしたいと思います。

拉致問題以外にも、世界に人権問題はたくさんありますが、僕はこの問題について学習したことで世界中の人が笑顔で生きられる世の中になるよう心から願うようになりました。

特別賞 「私が考えたこと」

福島市立信陵中学校2年
梅橋 萌

私は、アニメ「めぐみ」を視聴するまで、北朝鮮による日本人拉致問題についてあまり考えたことはありませんでした。この問題は私が生まれる前の問題で、ニュースで時々報道されるのみで、この問題についてよく知りませんでした。「めぐみ」の途中に、「たった十人余りの失踪者のせいで日本と北朝鮮が友好関係が築けなくなっているのか」という政府の中にそういう声があったとありました。私は、それが本当に信じられませんでした。その人にとって、十人の人達の苦しみは、他人事なんだろうなと思いました。学校の先生や大人は、私達に「周りの人と仲良くしなさい」と言います。ですが、政府の中の方は同じ日本人の方々を救うことよりも、北朝鮮との友好関係の方が大事なのでしょうか。これを聞いた拉致被害者の親族の方々は、本当に悲しかったと思います。悔しかったと思います。一九九八年に設立された北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会、通称「救う会」は、拉致被害者の親族の方や友人の方により結成された市民団体です。悔しい思いや悲しい思いをした方々が集まって、本当に強い方々だと思いました。人並みに幸せな日々を私は当たり前だと思ってきました。ですが、横田めぐみさんは、その生活を十三年間で終わってしまい、私は、当たり前だと思っていたこの生活も当たり前じゃないんだと改めて、たくさんの人に感謝しました。これから生きる一日一日を大切にしようと思いました。

日々、どこかで起こっているテロ事件や拉致問題は、私達にはどうすることも出来ないと思います。私は、自分達に何が出来るか考えました。一つは、「救う会」などに積極的に参加することです。拉致被害者の方を早く元の生活をして欲しい、そして一刻も早く日本へ帰ってきて欲しいのです。なので、私も積極的に参加して、自分出来る限りの事をしたいと思いました。二つ目は、被害者の方の親族の方々を支えたいと考えました。つらくて、悲しい思いをずっとされてきた方々の心を支えたいと思いました。その苦しさをたくさんの人と共有すれば、ボランティアにも積極的に参加してくれる人も増えるのではないかと思います。

この被害者の方々は、ただいつも通り、幸せに生活してただけなのに、なぜ私達よりもたくさん苦しい思いをしなければならないのか、私は悲しく思います。早く日本へ帰って、元の幸せな生活が早く戻ってくるように、心から願います。

特別賞 「信じる力で」

今、日本は北朝鮮との問題を抱えています。最近ではミサイルや核実験などがよく話題に出ています。拉致という昔からの問題をまず解決すべきではないでしょうか。

北朝鮮の工作員等によって拉致されてしまった方は何の罪もないのです。何の前ぶれもなく突然起きた拉致による行方不明の可能性がある方は八八三名もいるのです。しかし北朝鮮が認めた拉致被害者は十七名しかいません。その中の一人が横田めぐみさんです。四十年以上も前に忽然と姿を消しました。たった十三歳で部活帰りに拉致されてしまっためぐみさんは心細かったと思います。船倉に閉じこめられている間「お母さん、お母さん」と泣き叫び壁などを引っかき手は血だらけだったと言います。めぐみさんが帰らないと心配した早紀江さんは必死にめぐみさんを探しました。ひたすらめぐみさんの無事を願い続けました。それでも見つからないめぐみさんを思いご家族はどれだけの涙を流したのでしょうか。きつと数え知れないほどの涙を流したと思います。めぐみさんが見つからないまま二十年が過ぎ、めぐみさんが生きているという情報が入りました。五年後、日朝首脳会談で北朝鮮は拉致を認め謝罪しましたがめぐみさんはもう亡くなっていると言います。二年後嘘の遺骨を提出しました。ご両親は心の底から激しい怒りがわいてきたそうです。大切な娘が亡くなったと言われ、悲しみと苦しみの中横田ご夫妻は署名活動や

東京都 立川市立立川第七中学校1年 高木柚実風

講演会を行いました。少しでも多くの人に拉致を知ってもらいたい。めぐみさんを助けたい。その一心で懸命に活動する中、横田ご夫妻の前を素通りしていく人がいたそうです。それでもあきらめないで活動を続けています。絶対にめぐみさんは生きて帰って来る。そう信じて本も出版しています。『めぐみ、お母さんがきつと助けてあげる』には、めぐみさんと離れた苦しさやつらさ、拉致と知った日からの活動が記されていました。私はこの本を読み感動しました。今もずっとめぐみさんを思いこまでやってきた横田さんご夫妻をすごいと思いました。

今私達に出来る事それは、限られているかもしれませんが。でも特別な事が出来なくても拉致に興味を持つだけで、拉致に対する考えが変わり、めぐみさんや拉致被害者を助ける一歩が踏み出せるかもしれないかもしれません。めぐみさんは今、家族の事を思い、自由がない中で一生懸命生きています。政府は安倍総理が総理大臣である内に解決すると約束しています。めぐみさんが「ただいま」を言える日は絶対に来ます。今の日本はいくつ戦争が起こるか分からないです。人類は百年で滅びると言われています。でも私達の信じる力で変えましょう。千年でも何年でも長く。信じましょう。めぐみさんが四十年遅れた「ただいま」を言える日を。笑顔で「おかえり」と言える日を。

特別賞 「北朝鮮による拉致事件」

横田めぐみさんは、その日の朝、いつものように中学校に出かけていきました。しかし、夕方になっても帰ってくるはずのめぐみさんは帰ってきません。ご両親はどんなに心配したでしょう。その頃、めぐみさんは北朝鮮の工作員に拉致されて、どこに行くかも分からない船の中に閉じ込められて、悲痛な叫び声をあげていました。

拉致目的は、北朝鮮工作員による身分偽装としての利用や北朝鮮工作員を日本人に仕立てるための教育係として利用することだそうです。また、洗脳し、工作員や技術者として北朝鮮で働かせるために行われたとも言われています。さらに、拉致被害者は日本人だけでなく、韓国や中国、タイやマレーシアの人も被害に遭っているそうです。拉致被害者たちは国籍に関係なく、家族や愛しい人々と離ればなれになり辛い思いをしているのです。

拉致被害者で、帰国することができた曽我ひとみさんは、「地元の近所の人たち、同級生、全国からの温かい励ましの中で生きてきました。」と語っていました。私が同じ立場であって、帰国できたとしても、色々な人たちの励ましがなければ生きていけないだろうと思います。北朝鮮が弾道ミサイルを発射したり核兵器の実験を行ったりするなどの緊迫した国際情勢に対して曽我ひとみさんは、こうも言っていました。「本当に恐ろしいことだと思う。でも、私は、ミサイルよりもっと大切な問題があると思う。」と。弾道ミサイルの発射や

徳島県 阿南市立福井中学校3年 原田日菜

核実験に隠れてしまい、拉致問題が忘れ去られることを危惧されているのだと思います。私もそう思います。拉致問題は、絶対に許されることのない人権問題なのです。

平成十四年九月十七日、当時の小泉純一郎総理大臣は、北朝鮮の金正日国防委員長と初の首脳会談を行いました。北朝鮮からの情報は五人生存、八人死亡、二人未入境というものでした。横田めぐみさんに関しては、死亡ということでした。しかし、北朝鮮からは納得のいく説明や証明が未だにされていません。残された家族は、激しい悲しみの中で、今も大切な人の帰りを待っていることでしょう。

北朝鮮による拉致問題に対して、私にできることは多くはありません。今、私にできることは、この問題を伝えていくこと、忘れさせないことだと思います。機会があれば、この問題を正確に伝え、北朝鮮による拉致問題を風化させないようにしていきます。

特別賞 「一刻も早い帰国のために」

私は「拉致問題」と聞いても、全く知識がなかったため、「何それ？」と思うだけでした。しかし、授業で拉致問題の学習をしたり、「めぐみ」のDVDを見たりしたことをきっかけに興味を持ちました。また、国連の演説でアメリカのトランプ大統領が、拉致被害者の「横田めぐみさん」について述べたことで、自分でも調べてみようと思いました。調べていく中で、拉致問題は、私が想像しているよりも悲惨な問題であることを知りました。

「拉致問題」と検索しただけで、たくさんの記事が出てきました。その中でも「横田めぐみ」という名前が一際目を引きました。めぐみさんは、今から四十年前に十三歳という若さで北朝鮮へ拉致されました。今の私よりも若い歳で、新潟から四十時間もの間、真っ暗で寒いところに閉じ込められて異国に連れて行かれたと思うと、考えただけでも耐えがたく、辛い気持ちになります。

めぐみさんだけでなく十七名もの人が拉致被害者と認定され、さらに多くの人が拉致された可能性が高いとされていることも知りました。北朝鮮は、こうしてたくさんの方々のかけがえのない人生を奪いました。そして、拉致された人たちの家族は、激しい悲しみの中で、今も大切な人の帰りを待っているのです。こんな事実を知ること、今まで自分はなぜ拉致問題に目を向けることをしなかったのだろうと、自分自身の生活を悔やみました。

徳島県 阿南市立福井中学校3年

橋本夏都

日本政府は、すべての拉致被害者の安全確保と速やかな帰国を要求し、拉致問題対策本部を中心に、拉致問題の解決に取り組んでいます。平成九年には、それまで孤独に戦い続けていた拉致被害者の家族が団結して、「家族会」を結成しました。平成十四年には、当時の小泉純一郎首相の訪朝をきっかけに、拉致被害者五名が帰国することができました。しかし、他の方々を取り戻すことはできていません。様々な取組をしているにもかかわらず、未だに解決していないことが、拉致問題の深刻さを物語っています。

一刻も早く拉致被害者を救い出すにはどうすればよいのでしょうか。今、私たちにできることは、拉致問題という問題があり、未だに解決していないということをしっかりと認識することです。一人一人が拉致問題に関心を持ちましょう。それが、この問題の解決に向けてのとても大切な一歩となると考えます。

家族と幸せに暮らしていた人たちの人生を奪い去った北朝鮮による拉致。ある日、突然連れ去られ、今も救出を帰国を待ち続けている人たち。拉致されたのが、もしも自分だったら、自分の家族だったらと思うと胸が張り裂けそうになります。拉致問題は許されるべき問題ではありません。拉致被害者の一日も早い帰国のために、まず自分自身ができることに精一杯取り組もうと思います。

特別賞 「北朝鮮による拉致問題の重さ」

徳島県 阿南市立福井中学校3年 宮田遥奈

私は、北朝鮮による拉致問題についてあまり知りませんでした。日本人で拉致された人数は十七名。その内の五名が二〇〇二年十月に帰国しています。しかし、他の拉致被害者の方々の帰国は、今になっても果たされていません。先日、「めぐみ」のDVDを視聴しました。拉致されるまでは、今の私たちと同じような普通の女子中学生の生活をしていました。一九七七年十一月十五日の朝、いつもと同じように登校しました。しかし、下校途中に拉致されてしまいました。めぐみさんは、暗い船室に閉じ込められ、恐怖でいっぱいだったことでしょう。めぐみさんの家族も不安で押しつぶされそうになりましたが、いつか会えると耐えていたことでしょう。木太町に拉致されたことがわかったときは、生きていたことへの安堵感と拉致という現実の間で、揺れ動いたことでしょう。他の拉致被害者のご家族も同じ思いだったことだと思います。

拉致問題に対する北朝鮮の主張には問題点がいくつかあります。まず「安否不明の拉致被害者十二名の内、八名死亡、四名は入国していない」という責任感のない発言。また、北朝鮮が死亡したと報告している被害者の生存情報に対しては、「日本側は、死んだ被害者を生き返らせろと無理な要求をしている。」という、日本側を非難する発言。これらは、北朝鮮が日本に送った「悪意」であり、問題発言だと思います。

北朝鮮による拉致問題について知った今、私がしなければならぬことは、この問題を知らない人たちに伝えていくことです。私たちは、当たり前のように楽しく学校に通って、勉強したり運動したりしています。家庭でも家族で食事をしたりテレビを見たり、時には親に対して反抗したり、ケンカをしたりすることもあります。しかし、そのような当たり前の毎日が、突然奪われてしまうかもしれません。もし、私の身の上に、そんなことが起こったら、怖くて怖くて仕方ありません。そのような思いを、今現実に行っている人が、まだたくさん残されているのです。拉致されて安否不明の十二名をはじめ、他国の被害者もいるのです。「当たり前の生活」は「当たり前前の生活ではない」ということをしっかりと伝えていきたいです。

二〇〇二年九月十七日、当時の小泉純一郎首相が訪朝し、金正日国防委員長と首脳会談が行われました。金国防委員長は拉致を認め謝罪しました。五人は帰国できたけれども、十二名の方の安否は不明なままです。大切な家族が帰ってくるのを待っている人たちがたくさんいます。年老いて、再会できないまま亡くなった方もいます。その方たちのためにも、一刻も早い問題解決のために、今私ができることをしっかりと実践してやっていきたいです。

高校生部門

最優秀賞 「拉致問題解決への一步」

「私たちは、この問題を忘れてはならない」それは、拉致被害者の家族の願いです。

拉致被害者を題材にしたDVD「めぐみ」を視聴しました。横田滋さんと早紀江さんがたくさんの方の力を借りて拉致問題を解決しようと街頭で精力的に活動している姿から、娘を取り戻すという強い思いを感じました。また一方で、被害者の家族が、この問題が解決されず時間だけが過ぎ去っていく不安を抱えているとも思いました。

また、「めぐみへの手紙」という新聞記事も読みました。その中に、横田めぐみさんの御両親の「必ず日本に帰って、新しい写真撮ろうね」という言葉に胸が詰まる思いがしました。めぐみさんの父・滋さんが、四十年前に中学校の学生服を着ためぐみさんの写真を撮りましたが、めぐみさんはその年の冬に拉致されました。めぐみさんと一緒に日本で過ごしたいと強く願う親の気持ちが強く感じられました。

拉致問題は、我が国の国民的課題です。この解決には、国民一人ひとりがこの問題に関心をもち、世論を高めて拉致問題の解決の必要性を国内外に訴えなければなりません。なぜなら、国民が拉致問題を重要視しなかったら、北朝鮮との交渉で拉致被害者を取り返すという日本の意思が弱いと北朝鮮に思われる可能性があるからです。

拉致問題に関心をもちつことは、拉致被害者や被害者の家族

愛媛県立しげのぶ特別支援学校高等部2年

花山星太

が辛い思いをしていることに気付く、その人たちに寄り添うことです。私たちは、身近な人に同じような気付きや寄り添いができているでしょうか。もし、そうでなければ、遠いところにいる被害者の方に関心をもちつことなどできません。

自分自身のことを振り返ると、近くににいる友人がその場でどんな手助けが必要かに気付いて、もっと手助けができるのではないかと反省することがあります。

私自身、拉致問題への関心をもちつ高めたいと思っています。そのためには、まず、身近な人にもつと関心をもたなければなりません。私が学んでいる特別支援学校には、障がいのある人が身近にいます。その人たちがどんな願いをもち、どんな生活をしたいか、また、どんな場面でどんな支援を必要としているかを考えてそれに気付くよう努めたいです。このことが、拉致被害者やその家族への関心を高めることにつながると 생각합니다。

また、毎日常の会で行っている一分間スピーチで、拉致問題について話すつもりです。そうすることで、私自身この問題への関心をより高められるし、周りの人たちにこの問題に関心をもちつもらいやすくなります。

拉致問題の解決には、一人ひとりのこのような小さな取組が必要です。できることから少しずつ行動を起こしたいと思います。

優秀賞 「風化させないために私にできること」

北海道北見緑陵高等学校1年 山崎裕香

今、横田めぐみさんを含め北朝鮮に拉致された人達は、どこで何を思っているのだろうか。

めぐみさんが十三歳で拉致された時、私はまだ生まれていませんでした。このことについて知っていたのは「横田めぐみさん」という人が拉致された」ということだけで、拉致という言葉の意味もほとんど知らず、詳しく知ろうとしてもきませんでした。そして今回、この『めぐみ』というアニメを見て、はじめて拉致問題の現状や残酷さを知りました。

めぐみさんが拉致されてから四十年が経過し、拉致被害者本人も、その家族も、やはり一番は互いに会えない辛さを感じていると思います。しかしそれ以上に、世間に忘れられる不安、解決が遠のいていく不安に苦しめられているのではないかと思います。北朝鮮に拉致された人達がいること、今も尚、北朝鮮で助けを求め続けていることを私達は、決して忘れてはいけなしいし、何よりもこのことを知らなければいけないと思いました。

拉致問題解決のための第一歩は、風化させないことだと私は思います。そのためには、まずたくさんの人に拉致問題について知ってもらう必要があります。しかし、人間は、時間が経てばたくさんのかげを忘れてしまいますし、次から次へと起こる事件にニュースも切り替わっていきます。だからこそ、決して忘れてはいけない問題

については、政府とマスメディアが協力し、取り上げるべきだと思います。政府は世論に敏感です。ならば、私達がこのことに関心を持つていること、拉致問題の解決を望んでいることを政府に届けなければなりません。北方領土のニュースはよく目にします。それは、国民の関心があるからだと思います。

私がアニメを見てから拉致問題についての詳細を知ったように、今の高校生は、事件のことは知っていても、詳細を知らないという人がたくさんいるのではないかと思います。今回見たこの『めぐみ』というアニメを、もっともっとたくさんの人に見てもらい、理解を深めて欲しいと思いました。そのためには、全国の小・中・高の授業で取り扱い、現状を知ってほしいです。私自身も、このことをたくさんの人に紹介していきたいと思います。先日、SNSで『めぐみ』を見たんだ」と書いただけで、「何それ？」という反応がありました。より多くの人に伝えるためには、ユーチューブやSNSの活用を、政府も試みて良いのではないかと思います。

一人の人間にできることは限られています。その中で自分にできることは、このことを忘れないこと、そして伝えていくことだと思っています。私がこのことを知れたのも、このコンクールがあったからです。こうした取り組みが続くことを心から望みます。

優秀賞 「拉致から解放するために」

千葉県 敬愛学園高等学校1年

福島健輔

拉致問題、それを聞きあまり興味を示さなかった以前の私に羞恥心を感じました。

アニメ「めぐみ」を視聴し、拉致され家族と会えなくなってしまった横田めぐみさんの恐怖や悲しさが一気に私を襲いました。そして拉致から40年経過した今に至っても訴え続けている横田滋さんと早紀江さんの必死さと心の痛みを感じました。アニメを見る前までは、返還を訴える拉致問題のニュースを見て「北朝鮮って悪いことしているな。」ぐらいしか思っていました。拉致問題がどのようなものなのか、その悲しみについて私は触れようとしなかったのです。娘と会えなくなり、今でも努力し続けている人たちに共感しなかった自分が人として恥ずかしいと今は思っています。同時に、なにが私たちにできるか、それが日本に住む国民として考えるべきことだと思いました。

インターネットを使って調べ、出てきた情報は日本人以外の被害国でした。タイ、ルーマニア、レバノンの国々が挙がっており、拉致問題は国際社会全体の問題になってきていることを知りました。拉致問題がこのまま広がっていてもよいのでしょうか。解決方法として私が考えるのは世論に訴えて関心喚起することでした。しかし、この方法の難しい点はビデオを見ていなかった以前の私のように、興味を示さない人が多い現状であるからです。そこで私は、世

の中の人々がこの問題にどうしたら興味湧くか、有効な方法があるのか調べました。ジャーナリストの櫻井よしこさんが国際協調という言葉を挙げていました。それは外国の人たちに拉致問題のことを伝えることで拉致問題を国際的に解決することでした。私はこの方法はとても有効だと思います。多くの国民に伝えることにより、よりいつそ世界中の人々にこの拉致問題の悲惨さが認知される、と思いました。

私はこの問題を私が所属する弁論部において、弁論という形を通して伝えていきたいと強く思っています。身近な行動で拉致問題のことを広げていくことによってまず身近な人たちに関心を持たせることにしました。最近の日本はグローバル化が進み国際的になっているのを利用しながら「国際協調」につなげていけると良いと思います。拉致問題は日本人の人權に係る重要な問題だと思っています。家族が突然消えてしまう、そのことについて私たちは同じ日本国民としてもっと関心を持ち、横田さん夫妻の身になって自分のまわりのことを考えるべきではないでしょうか。家族に再び会いたいという思いに賛同する、そのことを自身のこととして考えてみる想像力が大切なのです。

特別賞 「めぐみを見て^{おも}念う」と

私が小学生の時、よく祖父から、「新潟に行く」と朝鮮人がいてさらわれる。」という話を聞いたことがある。子供心に、怖いと思った記憶が甦ってくる。その後、小学生の時に見学旅行で新潟に行く機会があったが、実際には何も起こらず、そんな話は嘘だったと思っていた。ところが、中学に入学した時、校舎のロッカーに「必ず取り戻す!」と書かれた赤い和服を着た少女が立っているポスターを目にした。よく見てみると、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんだった。この時初めて、あの祖父の話は本当だったんだと衝撃を覚えたのを今でも忘れることができない。

そして、その記憶も薄れかけた今年、高校の全校集会で、再びあの横田めぐみさんのアニメビデオを見る機会があった。集会の冒頭、教頭先生から内容の説明があった。「ウイデハンスリョン キムウン ジョンドンジケソヌン…」はじめ何を言っているのか分からなかったが、北朝鮮ニュースの女性アナウンサーをまねしたようで、その後話が進むうちに、麻袋を取り出した教頭先生は「この麻袋を頭からかぶせられて拉致された。」と、あの小学生の時の祖父の話が頭に甦り、恐怖と怒りで心が一杯になってしまった。その後、ビデオが始まると、こらえようとしても涙が後から後からこみ上げてきて止まらなかった。家族が突然いなくなってしまう気持ち、直ぐ隣国に生存している可能性があるのに国家間の交渉が進まないもどかしさ、

福島県立会津農林高等学校1年 猪股亜沙美

人の自由を簡単に奪ってしまう行為の卑劣さ、こんなことを思うと、どうしていいのかわからなくなってしまった。

今世界では、貧困や飢餓、人種差別等の様々な問題や課題が山積しているが、タイムリーにインターネット等の情報網で知ることが出来る。私たち高校生も、三十年前の高校生徒と比べると得られる情報量が格段に多くなってきているものの、反対に心の豊かさは薄れていると感じる。本来は、相手を思いやる心や相手を認める心が大切なことは分かっているにもかかわらず、直ぐに、暴力行為を起こしてみたり、いじめによって相手の心身を傷つけてしまったりする。北朝鮮の拉致問題も、すべては朝鮮半島統一のための蛮行であると聞くが、私は、北朝鮮の国家主席も同じ人間であり、地球に生存する人間としての平和の本質を再確認してほしいと思う。

私はこの会津で育ち、幼い頃からこの拉致問題を身近にしていたと思うと、何とかしたいという気持ちが大きくなった。そこで全国の高校生の力を結集し国に訴えかける運動を展開していきたいと考える。まずは、あのポスターを各校昇降口に必ず掲示させ、高校生が集まる集会で拉致問題について訴えかけていく。拉致問題は、決して他国の問題ではない、人間の人権を無視した行為であることを。

特別賞 「あなたの中の人権問題」

政府拉致問題対策本部企画・制作のアニメーション「めぐみ」を鑑賞しました。横田めぐみさんら十七名の拉致被害者の方々やその両親の胸中を思うと、やるせない気持ちに胸を締めつけられるとともに強い憤りを覚えます。もちろんその憤りの矛先は、このような悲惨かつ深刻な問題の発端である北朝鮮政府や同国の工作員に向けられるものです。しかし同時に、当時の日本政府や日本国民の在り方に対しても、同じぐらいの憤りを感じました。

人権問題の最大の原因は、日本国民一人ひとりの認識の甘さ、そして何より日本政府の対応の遅れにあったのではないかと。

北朝鮮に日本人が拉致されている、という事実が明らかになったのは一九八七年、大韓航空爆破事件の実行犯の一人である金賢姫氏の証言によるものでした。その約十年後、横田めぐみさんが北朝鮮に捕らわれていることが判明します。それに伴いめぐみさんのご両親は署名活動を開始しますが、ビデオからはめぐみさんのご両親に対する国民らや政府の冷たい対応を伺い知ることができました。私はその中で、政府の関係者が「たった十人あまりの失踪者のせいでは日本と北朝鮮が友好関係を築けなくなっているのか」と発言している場面を見て、人命を軽視しているかのような言動に、政府に対するこの上ない怒りを覚えました。

北朝鮮が初めて日本人拉致を認めたのは二〇〇二年のことでした。

千葉県 敬愛学園高等学校2年

寺田有希

横田めぐみさんが北朝鮮に捕らわれていることが判明してからこの日朝首脳会談までの間に、五年もの月日が流れています。その五年の間に、日本政府がもっと踏み込んだ調査や話し合いを重ねていれば、と思わずにはいられません。

これからの私にできることは何なのか。それは、拉致被害者やその家族から上げられる声に敏感になることだと、私は考えています。先ほど、人権問題の最大の原因は日本国民一人ひとりの認識の甘さにあったのではないかと述べましたが、当事者以外の人間が問題意識を持つためには、当事者の話に耳を傾けるほかにないと思うのです。そして、この問題に対する理解をより深め、私の同世代の人たちに対しては弁論という形で、もっと多くの人たちに、この人権問題・拉致問題について一緒に考える機会を作っていきたいと、私は心から思います。警察庁の調べによれば、現在も北朝鮮による拉致の可能性を排除できない行方不明者は八八三人いるとされています。これ以上不幸な事態を招かないためにも、このことをあなた自身の問題として捉えてみてください。

特別賞 「拉致問題解決に向けて」

新潟県立長岡大手高等学校1年 前田ちあき

「お父さん、お母さん！助けてー!!」

この作文を書くにあたり、十三歳の時に北朝鮮に拉致された横田めぐみさんのアニメを見ました。その中で最も印象に残っているのは北朝鮮の船の中で助けを求めて泣き叫ぶめぐみさんの姿です。十三歳というと今の私よりも年下です。中学一年生で新しい友達もできて中学校での生活が楽しくなってきた頃だと思いますが、そんな時にめぐみさんは北朝鮮に拉致され、自由を奪われました。家族や友達と過ごしていた楽しい日々を奪われました。どこに連れていかれるかも分からない、誰も助けてくれない、そんな怖い思いをした人はめぐみさんだけではありませんでした。政府が認定している拉致被害者は十七人です。こんなにも多くの人が北朝鮮に拉致されました。そのうち日本に帰国できたのは五人です。その中の一人である蓮池薫さんの講演会が今年の春、私の学校で行われました。その中で、北朝鮮に拉致されている間の経験や、心情をお聞きし、色々と考えさせられました。自由な生活や夢を奪われた辛い状況の中でも前向きに懸命に生きてきた蓮池さんの講話はとても印象的でした。未だ解決していない拉致問題ですが、その解決のために私達は何ができるのでしょうか。一つには様々な活動に協力することだと思います。以前、家族と出かけた時に署名活動をしている人達を見ました。私が署名をすると「ありがとっ」という言葉と共に「ブルー

リボン」が渡されました。後で調べてみるとその名前には日本と北朝鮮とを隔てる「青い海」と、被害者とその家族をつなぐ「青い空」という意味が込められているそうです。これからもそのリボンを大切にしていきたいです。二つにはもっと多くの人が拉致問題について知ることだと思います。蓮池さんのように講演会が開かれたり、街中のお店などにポスターが貼られたりしていますが、人々が拉致問題について正面から向き合い、考えることが大切だと思います。

最後に、拉致問題について考えてみて改めて学んだことがあります。それは、家族と楽しくご飯を食べられていること、友達と他愛もない話で笑い合えること、毎日学校に通って自分の将来のために勉強ができていること、楽しく部活動ができること……。当たり前のように過ごせている毎日がとても幸せなものであるということだと思います。これからも自分の命はもちろん家族や友達と過ごす一日一日を大切にしていきたいです。そして、めぐみさんをはじめとする拉致被害者の方々の少しでも早い帰国とそのご家族に幸せな日々が戻ってくることを心から願っています。また最近では北朝鮮からミサイルが発射される問題もありますが、日本と北朝鮮の国交関係が回復し、平和な世界になってほしいです。

特別賞 「拉致問題、忘れない」

めぐみさんは今の私たちみたいに毎日家族に愛され、友達と楽しく普通に生活を送っていたのにある日突然北朝鮮の船に乗せられ拉致されるという、こんな恐ろしいことがあるのかと私は信じられませんでした。なぜ何の罪もない、未来が待っている人が拉致される必要があるのか全く理解できません。家族の方も本当は「なぜ自分の子どもが連れて行かれなければならないのか」といくら考えても答えがでることのない自問と日々戦い、「自分の子どもは日本のために犠牲になり、使命を果たした」と自分に言い聞かせて生きておられることでしょう。このようなご家族の方のお気持ちを考えると本当に心が痛くなります。そして、その後心の底から笑ったり、日本のことを信じるのがでなくなる生活など全く想像がつきません。

北朝鮮は、朝鮮戦争の休戦後も韓国を社会主義化して朝鮮半島を統一しようとしてきました。しかし、当時、韓国人を装って北朝鮮から韓国にスパイを送りこむことは難しかったので、日本人を装って韓国にスパイを送りこむという方法が考えられ、日本人を北朝鮮へ連れて行き、北朝鮮のスパイをその日本人になりすませたり、北朝鮮のスパイに日本の習慣や日本語を教える先生にするために日本人を拉致しました。その日本人が日本に帰って来ていないことを拉致問題といいます。拉致被害者のご家族の方が当時、日本の政府に拉致問題のことについて問うと「この問題で北朝鮮ともめて友好

関係がなくなっても良いのか」と言っただけであってくれなかったそうです。この時私は、何人かのために国際関係まで変わってしまうことはとても大変なことだけど、国民が他国に連れて行かれているのだから、少しでもご家族の心の支えになるようにこの問題について考えてほしかったなと思いました。そして北朝鮮に発言したりできるのも政府しかないので、これからも拉致問題対策本部として一刻もはやくの帰国を要求し続けてほしいと思います。

私にできることは、今回こうして拉致問題について知ることができたので、この知識を誰かに伝え、このような問題があること、いつ自分が連れて行かれるか分からないことを教えることだと思っています。社会ではドラマなどで放送することたくさんの人に拉致について知ってもらえると思います。私ができることはこんな小さいことだけで、どうにもすることができませんが、ずっと拉致被害者の方の一刻もはやい帰国とご家族の方に幸せが訪れるよう、心から願っています。そして、拉致という、自由を奪う行為を絶対に忘れません。

兵庫県立姫路南高等学校2年

井口真優

特別賞 「拉致問題について考える」

一九七七年、北朝鮮によって連れ去られた当時十三歳の横田めぐみさん。彼女が拉致され、また、ご家族の胸の内が描かれたアニメ『めぐみ』を見ました。今の私は、当時拉致被害に遭っためぐみさんと年齢が近いので、より一層親身になって見入ることができました。平和で穏やかな、何気ない日常が、ほんの一瞬で崩れ落ち、特に、愛娘が突然何者かに連れ去られてしまっためぐみさんのご両親が味わった悲しみや苦しみは、私たちでは測り知れないものだったと思います。ですが、それで終わりにせず「もし、自分の大切な人が拉致被害に遭ったら」「もし、自分が見知らぬ人に拉致されたら」と、少しでもその痛みを理解し、このように残酷な事件が起きてしまっていることを心に留めなければなりません。拉致被害者の方やそのご家族の心に、そっと寄り添い、拉致問題を決して他人事として考えず、また、過去形にしないことが、大切なのではないかと思います。

この拉致問題は、現在もまだ解決はしていません。また、最近では北朝鮮による『弾道ミサイル問題』や『核実験問題』などの脅威により、拉致問題の取り上げられ方が薄くなっているばかりか、一部のメディアでは「政権は問題を切り捨てた」などといった、言葉を失ってしまうような記事までありました。確かに今の問題も深刻ではありますが、だからといってこの拉致問題を隅に置き、ましてや切り捨てるなど、とんでもないことです。個人個人ではなく、日

佐賀県立鳥栖商業高等学校2年

柳島真輝

本全体に関わる事なので、弾道ミサイル問題や核実験と並行して、一日でも早い拉致被害者の解放に努めてもらいたいです。

最後に、今の私たちにできることですが、一つは、この拉致問題について関心を持ち続けることです。そうすれば、拉致問題が人々の記憶から消えることはなくなり、『過去の問題』としてあつかわれることもないと思うからです。二つ目は、周囲への警戒を怠らないことです。拉致は国外だけでなく、国内でも十分に起こりうることです。警戒しすぎても、精神的に疲れたり、疑心暗鬼になってしまったりしてしまうので、限度というものがありませんが、日頃から周りに気を付けて損をすることはありません。また、拉致被害者を救うことを目的とした『ブルーリボン運動』に参加するのもひとつの手だと思います。このような取り組みで、これから一人でも多くの人が拉致問題に向き合い、理解を深めてくれればいいなと思いました。

また、今回、拉致問題について考えることができ、自分自身にとってもよい機会になりました。今後も、拉致問題を始めた様々な問題から目を逸らさずに、しっかりと理解し向き合っていこうと思いました。

この作品集は平成 29 年、政府・拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール 入賞作品集

平成 30 年 1 月発行

【発行】政府・拉致問題対策本部
〒100-8968 東京都千代田区永田町 1-6-1
TEL：03-3581-8898
<http://www.rachi.go.jp>



主催：政府・拉致問題対策本部
後援：文部科学省、法務省

平成30年1月発行